

未来を拓く力としての 資質・能力を育む国語科学習

益田 俊男, 今井 克彦, 中村 幸介

1 国語科において育成すべき資質・能力

今回の学習指導要領改訂では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に整理した。

新学習指導要領解説（2017.7）によると、国語科で育成を目指す「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とは、「国語で表現された内容や事柄を正確に理解する資質・能力、国語を使って内容や事柄を適切に表現する資質・能力であるが、そのために必要となる国語の使い方を正確に理解する資質・能力、国語を適切に使う資質・能力を含んだもの」とされている。

中学校国語科においては、これに基づいて次のように教科の目標が設定された。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成することを目指す。

その中において育成すべき資質・能力は、以下の通りである。（下線 筆者）

①知識及び技能

社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようする。

②思考力、判断力、表現力等

社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。

③学びに向かう力、人間性等

言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

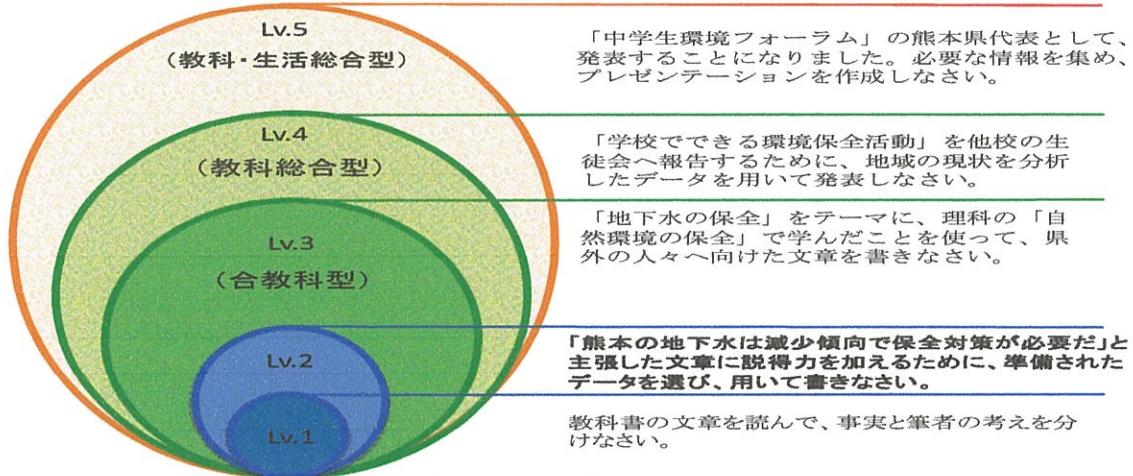
現行の学習指導要領で、実生活の様々な場面における言語活動の具体が示され、引き続き新学習指導要領でも「社会生活に必要な」、「社会生活における人との関わりの中で」という表現から、生きて働く力を志向していることが分かる。

国語科は他教科等と違い、様々な事象の内容を対象にするのではなく、言葉を通じた理解や表現、用いられる言葉そのものが学びの対象であるという特性を持つ。

2 国語科におけるカリキュラム・マネジメント

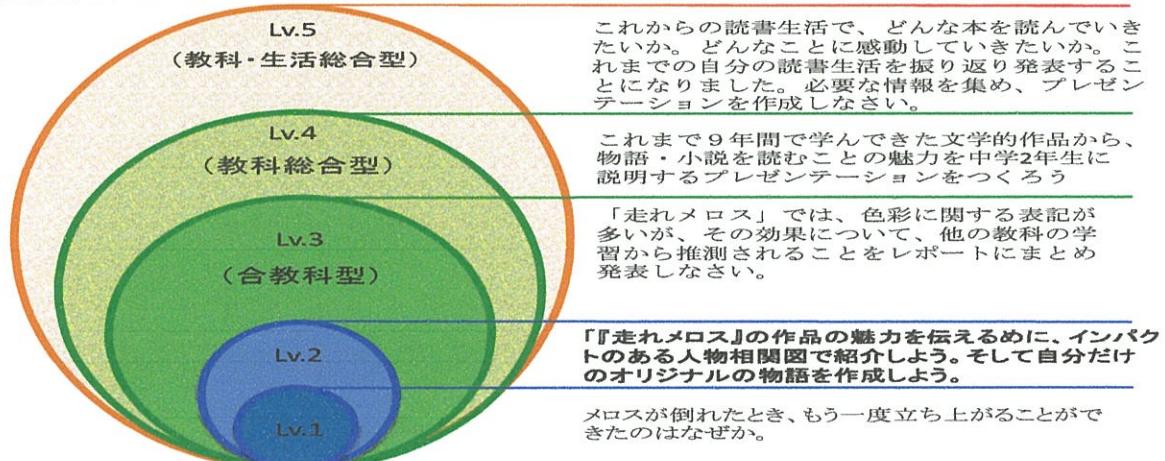
国語科での見方・考え方を生かした、国語科の Lv.1, 2の課題が、未来思考科の Lv.3, 4の課題でも生かせるよう学習過程を工夫して取り組みを行ってきた。先述の「社会生活に必要な」、「社会生活における人との関わりの中で」を意識した言語活動の中で、国語科で育てる資質・能力を育成していく。具体的には、以下の【資料1】、【資料2】において課題のレベルを紹介する。

1年生「スズメは本当に減っているか」(説明的文章)



【資料1】 説明的文章の学習課題レベル

2年生「走れメロス」(文学的文章)



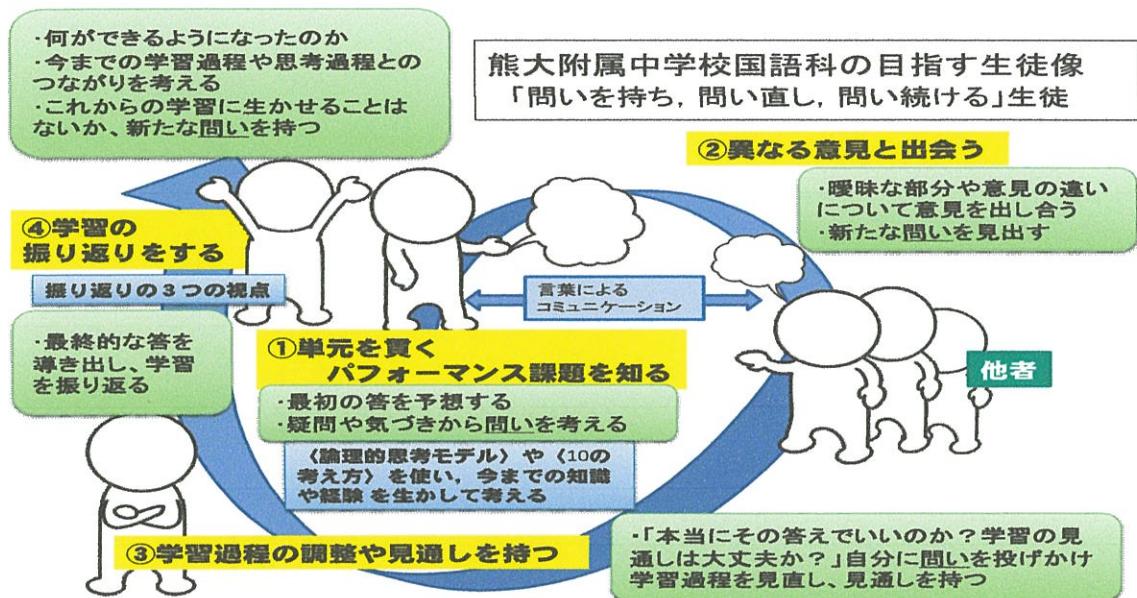
【資料2】 文学的文章の学習課題レベル

説明的文章、文学的文章のそれぞれ Lv.1, 2は教科内での課題であり、生徒の実態に応じた、パフォーマンス課題を設定している。このパフォーマンス課題の解決活動を生かして、未来思考科の Lv.3, 4の課題へ取り組めるようにしている。教科内でのパフォーマンス課題の問題解決過程での P D C A サイクル、そしてそのサイクルの中で生じた個人の「問い合わせ」の問題解決のサイクルが、未来思考科での学習につながっている。

3 未来思考科に取り組んだからこそ見えてきた国語科の授業改善

本校国語科で目指す生徒の姿は、「問い合わせ持ち、問い合わせ直し、問い合わせ続ける」生徒である。「問い合わせ」を学習の中心に据え、生徒の主体的な学習の連続性を意識し、学習プロセスで自然に生じる、生徒の疑問や問題意識等を「問い合わせ」とした。ここで生徒の「問い合わせ」が生じる場面として、①教師の提示したパフォーマンス課題に出会い、素朴な疑問や問題意識が生じる場面、②他者の異なる意見と出会い、曖昧性や意見の違いから葛藤やズレを生じる場面、③生じた多様な疑問や問題意識をどのように整理して、学習計画を調整し見通していく場面、④振り返りとして、他領域や他教科、日常生活でどのように生かせるかを考える場面、等が想定される。生徒から出された「問い合わせ」の質を見取っていくことは、課題解決遂行中の生徒の思考を見取ることにつながると考える。未来思考科に取り組んできたからこそ、見えてきた国語科の授業改善として、「問い合わせ」を中心に据えた国語科での「主体的・対話的で深い学び」の授業の実現に向けて、次の三点を重点的に取り組んできた。

(1) 単元を貫くパフォーマンス課題の工夫

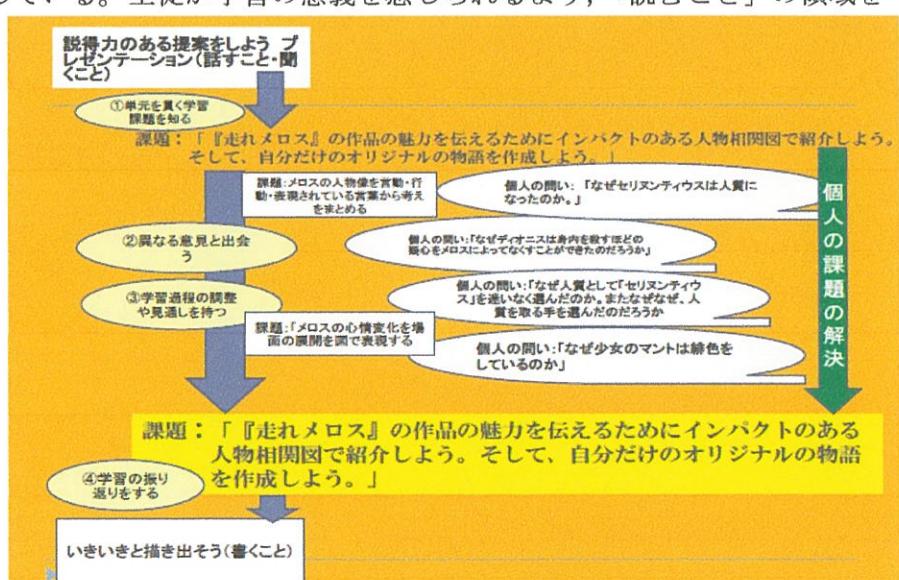


【資料3】 国語科における学習活動のイメージ

「平成28年5月 教育課程部会 国語科ワーキンググループ」より、考えを形成し深める力として、「新しい問い合わせや仮説を立てるなど、既に持っている考え方の構造を転換する力」の重視を示している。そこで、従来のスタイルであった、教師の示した課題に出会ったところからスタートし、解決するゴールまでの過程を振り返るという学習プロセスを、本年度は「主体的・対話的で深い学び」の視点で捉え直した。学習活動のイメージとしては、【資料3】となる。単元の最初の授業では、単元を貫くパフォーマンス課題を示す。パフォーマンス課題は、「この課題について追究・解決する過程で見られる姿や制作物が、評価基準の具体になっているか」という視点（澤井 2017）や「パフォーマンス課題のシナリオに織り込むべき6要素」（西岡 2008）を参考に、設定している。生徒が学習の意義を感じられるよう、「読むこと」の領域を中心とし、それぞれの単元を貫くパフォーマンス課題を提示した。

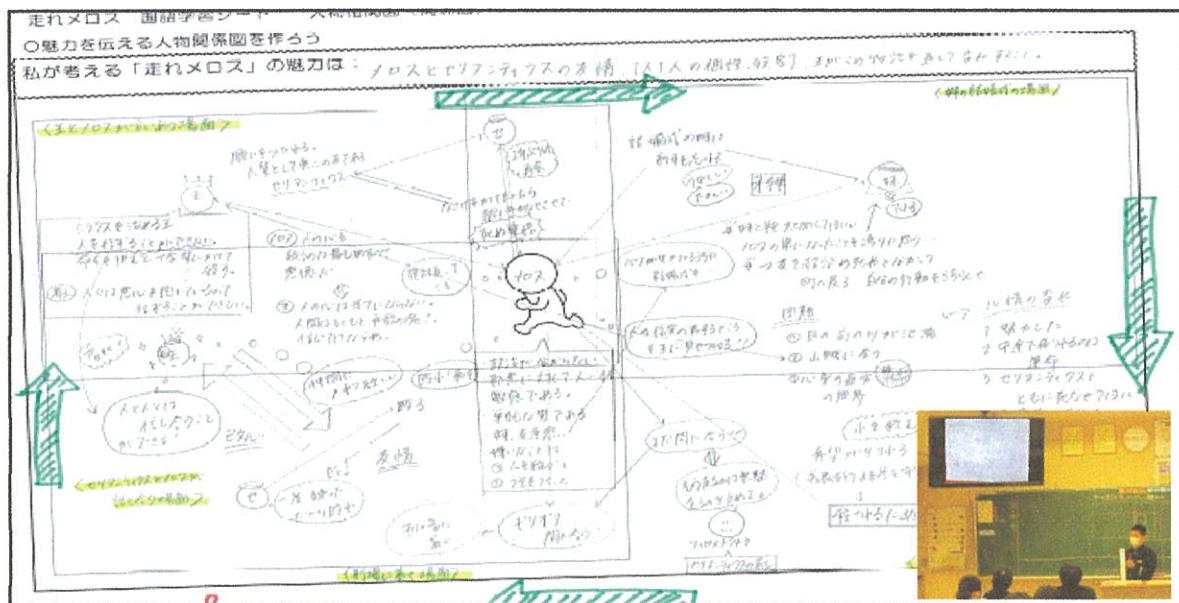
「説得力のある提案をしよう プレゼンテーション（話すこと・聞くこと）領域での、教科書の記述を根拠とし、主張に対する理由付けを加えた学習を行った。その後、「走れメロス」の学習では、【資料4】で示すように、単元を貫くパフォーマンス課題として「『走れメロス』の作品の魅力を伝えるためにインパクトのある人物相関図で紹介しよう。

そして、自分だけのオリジナルの物語を作成しよう」とした。生徒は【資料3】①～④の学習を行った。そして、生徒は自分の読みを生かし、【資料5】で示すような人物相関図を作成し、表現活動を行った。さらに「生き生きと描き出そう」（書くこと）領域では、ここで学んだ登場人物の設定や関係をオリジナルの作品として表現することに生かして書くことができた。



【資料4】 単元を貫くパフォーマンス課題づくり

これまでの「走れメロス」の課題としては、「メロスがまた走り始めたのはどんな力が働いたからだろう」など、教科書の記述をもとに、教科書内で課題を捉え、自己の考えのまとめとなっていた。しかし、生徒はパフォーマンス課題に取り組むことによって課題の分析を行い、自分の考えを他者と意見交流をし、表現しなければならなくなつた。



【資料5】 生徒が作成した人物相関図

(2) 生徒の「問い合わせ」を生かした問題解決学習の工夫

生徒は最初のパフォーマンス課題を知ったあと、すぐに「問い合わせ」を持って学習に取り組もうとする。そして、問題解決過程で他者との異なる意見と出会い、「新たな問い合わせ」を発生していく。そして、自分の学習について「問い合わせ」を中心とした学習過程の見直しを行うとともに、「最終的な答え」を解決する学習を行っていく。ここでいう「問い合わせ」とは、前述の説明にある生徒の疑問に、問題解決過程で生じた、新たな「問い合わせ」も含むものとなっている。生徒は課題を解決する過程で、新たな自分の課題も、同時平行的に解決活動を行っている。2年生の「走れメロス」の学習では、全体に掲示したパフォーマンス課題のほかに、生徒自身が学習過程で生じた自分の「問い合わせ」をレポートという形で解決する時間を設けた。生徒の「問い合わせ」としては、「なぜ、人質として『セリヌンティウス』を迷いなく選んだのか。またなぜ人質をとる手段を選んだのだろうか。」など、生徒がそれぞれ学習過程で生じた「問い合わせ」を個人の「問い合わせ」とし、仮説を立てて説明・検証する活動を行った。その結果、「セリヌンティウスとは活発な人間なのだろうか。」という「新たな問い合わせ」が生まれ、さらに生徒による課題解決活動により「最終的な答え」へと学習を進めていくことができた。つまり生徒自身による豊かな読みへとつなげることができた。

また、以下は、平成29年度 第2学年1,2学期に行った「走れメロス」でのカリキュラム・マネジメントの実践である。複数の文学作品の力を借りて、深い学びを効果的な文章で表現し理解を深めることをねらいとした。

〈教科書記載の従来の教材配列〉

〈領域〉教材	学習活動	付けたい力
〈話すこと・聞くこと〉 「説得力のある提案をしようプレゼンテーション」 5時間取扱	○聞き手の立場や考え方を想定して、説得力のある話を組み立てる。 ○資料や機器を活用して、分かりやすく印象的に話す。	A(1)イ 異なる立場や考え方を想定して自分の考えをまとめ、話の中心的な部分と付加的な部分などに注意し、論理的な構成や展開を考えて話すこと。 A(1)ウ 目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話すこと。
〈読むこと〉 「走れメロス」	○人物や情景の効果的な描写に着目して、作品を読み深める。	C(1)イ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味など

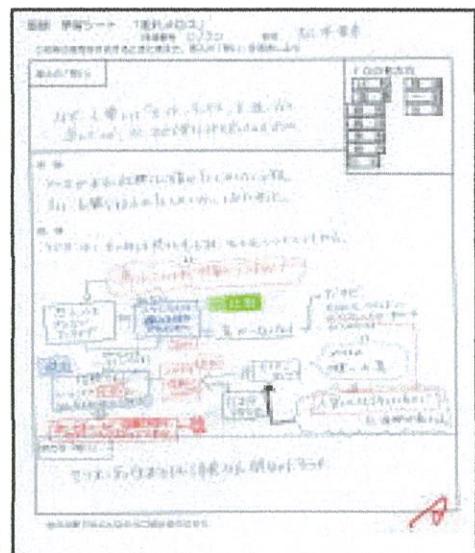
6時間取扱	○場面の展開や表現の仕方について、自分の考えをまとめる。	どを考え、内容の理解に役立てること。
〈書くこと〉 「生き生きと描き出そう」 6時間取扱	○情景や心情などを生き生きと表すように、描写を工夫して物語を作る。 ○書いた物語を読み合って、材料の活用の仕方などについて意見を交換し、自分の考えを広げる。	B(1)ウ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫して書くこと。 B(1)オ 書いた文書を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方について意見を述べたり助言したりして、自分の考えを広げること。

（単元構成後）



「教材」	学習活動	付けたい力
「説得力のある提案をしよう」「卒業ホームラン」「走れメロス」	○聞き手の立場や考え方を想定して、説得力のある話を組み立てる。 課題：『走れメロス』の作品の魅力を伝えるためにインパクトのある人物相関図で紹介しよう。そして、自分だけのオリジナルの物語を作成しよう。	
「生き生きと描き出そう」 計10時間取扱	○登場人物の言葉や行動がどんな意味を持っているかに注意して作品を読み味わう。 ○人物や情景の効果的な描写に着目して、作品を読み深める。 ○これまでの読書生活を振り返り、自分自身の価値観や物語に対する見方を問い直しながら、自分の体験や望みを見つめ直して、書きたい内容を考えて書く。	同上

それぞれの文学作品について、課題の設定から分析・解釈を行い、思考の過程が見えるよう学習シートに記録していった。学習過程の中で生じた生徒の問い合わせ、個人の「問い合わせ」とし解決した学習シートが【資料6】となる。学習中は、生徒達からは「この『問い合わせ』はいろいろな考えが出るかもしれない。」「この考えには今まで気づかなかつたな。」という自らの「問い合わせ」の変化を評価している声が聞かれるなどした。1学期からの継続した課題となっているため、自分自身の学びの成長を実感している感想が多く見られた。【資料6】は1人の生徒の「問い合わせ」を整理したレポートである。「新たな『問い合わせ』」の生徒の記述を見ると、矢印や線で囲んで図化したり、〈考え方シール〉を活用したりして、思い思いにまとめていることが分かる。「問い合わせ」を分析して、思考の流れを矢印でつなげている部分、関連させて考えている部分もある。この生徒は、人や物の存在する意味からスタートし、「問い合わせ」を分析し、解釈して明暗や色彩を視点にして関連させ、主題に迫っているのが分かる。最終的には、教材を離れ、色彩語の有効性や有用性について、領域を越えた可能性を探っている。



【資料6】 「問い合わせ」を解決するためのワークシート

（3）「振り返りの3つの視点」を参考にした学習の振り返り

国語科では振り返りをさせる際、「振り返りの3つの視点」で記述させた。【資料7】は、生徒たちの振り返りを複数抜粋したものである（□は筆者）。

知ったこと (今日の授業で)	つながったこと (今まで・他領域で・他教科で)	生かせること (これから他教科で・将来・私たちは)
<ul style="list-style-type: none"> 今まででは意見と推測の違いを考えて説明的文章を読んでいなかった。 相手を説得させる意見文の作り方が分かった。「構成」で資料と資料を関連させると、より説得力についてなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会でも表やグラフを使って読みとったりするのでつながってると思った。 家庭科で「魚を食べると本当に頭が良くなるか」で出てきたデータを本当に正確かどうか批判的に考えた。 英語の筋道立てた成分を書くときに、butなどの接続詞の使い方につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今回の学習では、使うデータとデータのつながりや、文章構成、接続詞、事実と考えと推測をどのように使えば、本当に減っているのかが作文にしてみるといまいちわかりにくかったかった。終わりの部分のまとめ方が不十分であった。自分の意見を最後に説得するには、どのように終わりの部分を書けばよいのだろうか。 「図化する」という視点から分かりやすく伝えることができる。その方法はもっとあるのだろうか。

【資料7】 生徒の振り返りの実際

3学年を通して他教科等の複数の既習知識とのつながりや他領域、他教科等の具体的な活用場面について想定している記述が多い。また、説明的文章では【資料7】にあるように、社会生活で必要なスキルに対して、自己の学習を振り返っている。今後は、生徒同士で振り返りを互いに共感できる場をさら設定していきたい。具体的に現実社会の場面でどのように考えられるか、などより現実的な思考を深める場の設定が必要であると考える。

4 成果と課題

(1) 成果

国語科では実生活を意識したパフォーマンス課題の設定を行った学習活動を行ってきた。この学習活動は、未来思考科をへつながることを意識したこと、より現実社会を意識した言語活動となった。問題解決過程で発生する個人の「問い合わせ」が生徒にとって、より切実な「問い合わせ」となり、学びに向かう力、学習意欲の向上につながった。また、「問い合わせ」を中心としたPDCAサイクルによる、カリキュラム・マネジメントを行うことで、これまで、生徒の内言として閉じていた「問い合わせ」が、生徒にとってより深まりのある「新たな問い合わせ」として問題解決課程の中で表出し、「問い合わせ」続ける生徒へつながって来ている。また、生徒はこれまで国語科の授業の中だけでの振り返りを行っていたが、「振り返りの3つの視点」を生かした学習の振り返りをすることで、他教科での学習をつなげた振り返りを行うことができた。つまり未来思考科での合科的、教科統合的な視点の振り返りが生きた。

(2) 課題

課題としては、生徒の疑問や気づきが「問い合わせ」という形で自由に表出したとき、課題解決過程のどの場面で、どのように取り上げ扱うのか、言語活動や手立てをどう考えていくことができるかがある。

パフォーマンス課題を設定するにあたり、本単元が迫る価値観が自己内対話で終わりがちである点から、さらに課題の質の高まりが必要となる。課題の質が、他者に必然性のある発信ができるもの、現実的で生徒にとって切実なものとなっていかなければならない。

【参考文献】

- | | |
|---------------------|---------------------------------------|
| 熊本大学教育学部附属中学校（2015） | 『平成27年度研究紀要「未来を拓く力」を育成する教育課程の開発（2年次）』 |
| 澤井陽介（2017） | 『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』（東洋館出版社） |
| 富山哲也（2018） | 『中学校 新学習指導要領 国語の授業づくり』（明治図書） |
| 那須正裕（2017） | 『「資質・能力」と学びのメカニズム』（東洋館出版社） |
| 西岡加名恵（2008） | 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』（明治図書） |
| 三山真智子編（2008） | 『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』（北大路書房） |